広島県における今後の高等学校教育の在り方を検討する協議会会議録

平成24年 7 月23日 （月）

広　島　県　教　育　委　員　会

広島県における今後の高等学校教育の在り方を検討する協議会出席者名簿

平成24年７月23日（月）
午後２時から午後４時まで

１　出席委員（50音順）

青　木　　暢　之
赤　岡　　功
加　藤　　千　政
川　野　　祐　二
吉　川　　信　政
古　賀　　一　博
小　村　　和　年
牛　来　　千　鶴
坂　越　　正　樹
佐々木　　寛
砂　原　　文　男
武　田　　哲　司
冨　永　　健　三
中　川　　和　義
長　田　　克　司
西　井　　裕　昭
二　見　　吉　康
前　　眞一郎
毛　利　　葉

２　欠席委員（50音順）

伊　藤　　敬　之
寺　西　　玉　実
三　好　　久美子
山　口　　寛　昭

馬屋原課長代理：　皆様，こんにちは。ただいまから広島県における今後の高等学校教育の在り方を検討する協議会第３回を開催いたします。

それでは，坂越会長，よろしくお願いいたします。

坂 越 会 長：　はい。それでは，委員の皆様，お集まりいただきましてありがとうございます。では３回目の会議を始めさせていただきます。

お手元の会議次第に沿って進めてまいりますけれども，今日はスケジュールの確認といいますか，参考資料のほうで，前回も出ましたスケジュール表を用意してもらっています。１回２回と本当に多様な御意見をいただいて，正直，何か一つの方向にまとまるのかなという，その感もあるところで，これからどういう方向で行くのかというようなあたりを，少し事務局のほうで説明をしていただけたらと思います。

永井学校経営課長：　はい。それでは，失礼いたします。お手元に参考といたしまして配付しております検討協議のスケジュールを御覧ください。

本日は第３回会議として，本協議会の大きな２つのテーマのうちの１つ「本県を支える人材の育成と今後の高等学校教育の在り方」について協議をしていただきます最後の回となっております。第４回会議からは，第３回までの議論を踏まえ，「本県における今後の高等学校の在り方について」をテーマとして協議をしていただく予定となっております。

なお，本日は，19名の委員の皆様に御出席をいただいております。伊藤委員，寺西委員，三好委員，山口委員におかれましては，本日は所用のため御欠席でございます。

以上でございます。

坂 越 会 長：　はい，ありがとうございます。御説明いただいたとおりなんですけれども，まず，前半３回使いまして，求められる人材，そしてこれからの高等学校教育ということで，今日がその３回目，大きな一つのテーマの区切りということになります。そして，次回から，これを受けまして，実際に広島県の高校がどうあるべきなのかという話に進んでいくというスケジュールになります。

それでは，御用意いただいている資料の説明を続けてお願いします。

永井学校経営課長：　はい。資料番号１の資料を御覧ください。

この資料は，５月31日の第２回会議において，第１回会議における「本県を支える人材像」にかかわる委員の皆様の御意見をキーワードとして整理をし，資料番号１として提出をいたしましたけれども，第２回会議における小村委員，山口委員の御意見及び第２回会議の協議の内容を反映させて，改めて提出をいたしましたものでございます。

続きまして，資料番号２を御覧ください。

第１回及び第２回会議の協議を事務局でまとめ，整理をしたものでございます。

１は，第１回会議で御意見をいただきました，本県を内外から支える人材についてでございます。郷土の文化を知り，品性，経済力を身につけ，広島県から世界に発信できる等の人材像が意見として出されております。

２は，高等学校で身に付けるべき力について，第２回会議で，子どもたちが社会的に自立し，個々の夢を実現するための基礎となる力を涵養する必要がある旨の意見が，各委員から多く出されております。

そして，これらの力は，すべての高校生が身に付けるべき力と，個々の状況に応じて社会で活躍できるために身に付けるべき力と大きく２つに分けることができるのではないか，という形で，第２回会議において整理をされたところでございます。本日の資料では，基礎となる力（Ａ）と（Ｂ）としております。

そして，委員から出されました「高校生が身に付けるべき力」についての意見の主なものを，基礎となる力（Ａ）と（Ｂ）に分類をいたしております。

御覧いただきますように，高校生が身に付けるべき力として出されました意見のほとんどは，基礎となる力（Ａ）のすべての高校生が身に付けるべき力に分類をされております。

この資料の２ページの３には，「高校教育が目指すべき姿」について，これまで「本県を内外から支える人材」，「生徒が高校で身に付けるべき力」について協議をしていただきます中で，各委員から出されました意見のうち，「高校教育が目指すべき姿」に関連をすると思われるものを整理いたしました。

最後に，「参考資料」でございますが，これは，７月12日に開かれました中央教育審議会高等学校教育部会第10回会議の配付資料の抜粋をしたものでございます。

説明は以上でございます。

坂 越 会 長：　はい，ありがとうございます。参考資料，抜粋とはいえ，かなり大量のものですので，後ほどお目通しいただければと思います。いろんなことが書かれてあるんですけれども，高等学校へ進学する子どもたちが98％になっていると。義務教育ではないにしても，無償化されている中で，98％の若者たちが行っている学校，これが極めて多様化といいますか，もう少し違う言葉で言ったら柔軟な対応を求められている，そういう中で高等学校教育というのはどうあるべきなのか。高度な普通教育を施すための高等学校というのが，どこまでの力をつけて，高校生を社会に，あるいは大学に出していくのか。そういうかなり基本的な問題が書かれています。中教審のほうでも，こういう高等学校の在り方が改めて今問われて，話題になっているということで，見ていただければというふうに思います。

それでは，今日の協議に入りますけれども，これもちょっと手順を確認しておきます。

資料の一番最初の囲みのほうに，協議が１と２とございまして，協議１としているのが，これまでお話しいただいてきた生徒が高等学校で身に付けるべき力，そして，そのうち共通的に高校生がすべて身に付けるべき基礎となる力と，個々の状況に応じて社会で活躍する，そういう力。それこそ，ちょっとさっき触れましたような，個々の状況に応じて，高校生がいろんな，多様な環境，条件の中に置かれていて，なおかつ高校，まあ卒業という力をつけさせていくという，そんなこともここにかかわってくるんだろうと思います。

その協議の後，今度は高等学校教育がどういう姿を目指すのかということ。広島県の具体的な問題については次回以降の話になるんですけれども，これもすごく図式的に整理しますと，今日は，前半，少し，これまでの流れを踏まえながら，どういう力が必要なのかという，ある意味人材の目的の部分に当たるところの御論議を深めていただいて，それから，高等学校がそれに対してどういう道筋を提供できるのかという，ある意味方法論的な部分についても，御意見をいただけたらというふうに思っております。よろしくお願いします。

協議１　生徒が高等学校で身に付けるべき力について

坂 越 会 長：　では，資料のほうの番号２のほうを御覧になっていただければというふうに思います。

事務局から説明いただきましたけれども，見出しの２，高等学校で身に付けるべき力，基礎となる力（Ａ）と（Ｂ）。やっぱり，どうしてもすべての高校生が身に付けるべき力，これがあって初めて社会で活躍できるというのは，これは当然のことなんですけれども，そこを，いろんな置かれている状況等々，あるいは個性といったもの，そういうものを踏まえながら，これから，まず社会の中で活躍する力。すべての高校生ではないにしても，ここを特化して力をつけてやることが，これから社会を支える人材になり得るのではないかと，こういった観点でお話をいただけたらというふうに思います。いきなりで，ちょっと難しいかもしれませんけれども，ここはやっぱり，この前，女性起業のほうの優秀賞を受けられました牛来さんのほうに，まずは皮切りをお願いしたいと思います。

牛 来 委 員：　はい，ありがとうございます。私の場合には，専門性を持った，例えば起業家であるとか，あと専門家たちが多いものですから，ここに，基礎となる力（Ｂ）のほうのお話になってしまうんですが，一流の芸を極めるための基礎というところで。基本的に，まず，私の周囲を見回してみても，専門性を持った，例えばデザイナーや，カメラマンや，ライターや，プランナーやという人たち，あるいは起業家を見たときに，正直，例えば企業の就業時間内で普通に仕事をしていて，求められる結果を出せるというのは現実的に非常に厳しくて，要は，いつまででも没頭して，それに集中してできるというところも，まず，マインド的な自分の意欲というところが，とても将来的に必要となってくるものなんです。それをさかのぼっていくと，結局は，これをやりなさいと言われて続けるものではなくて，やはり自分が好きなものとか，得意なものとかということであれば，もう本当にだれに何を言われようと続けられたり，いろんな壁を突破できたりという力につながると思うんですよ。

そういうことは，まずは，いろんな職種がある中，職業がある中で，その多様な職業をまず見せてあげることと，それと，自分が本当に好きなもの，得意なものというところを突き進めさせてあげるような，何かそういった方向が一つ要るのかな，その専門性

を持った子を育てるためにはというところを，漠然とは感じています。

坂 越 会 長： ありがとうございます。

もう一回突っ込みをさせてもらうんですけれども，牛来さん自身が今のような，すごくアクティブな活動をされる，御自身の何かそういうきっかけというか，経験のようなことをお話いただけませんか。

牛 来 委 員： ああ，なるほど。私自身は，もう自分がやりたいからやっているわけなんですが，好きだからというとこがそうなんですが，きっかけは，もともと自分自身は，本当に普通高校を卒業して，普通の大学を卒業してというところで，だれと何も変わらない人だったんですが，専業主婦をやっている時に出会いがありまして，企画会社で働いている女性たちとの出会いだったんです。要は，自分がそっちの世界に行くのは無理だと勝手にあきらめていたものが，事務員とか，そういったものにしかなれないと勝手に自分の殻をかぶっていたけれども，でも見た瞬間に，ああ，そこに，目の前にプランナーがいる，カメラマンの女性もいる，デザイナーもいる，イラストレーターもいる。ああ，すごい，その世界がもう別世界ではないんだと気づいた瞬間に，行けると思ったんですよね。そういう人たちに会える機会というのは，非常に重要かなというふうに感じます。

坂 越 会 長： ありがとうございます。

いろんな出会い，あるいは，いろんな職業といいますか，専門的な世界での経験ですよね，といったお話いただいたんですが，関連しても結構ですし，御自身の御経験からでも結構なんですけれども，こういう社会で，ある意味スペシャリストであったり，あるいは自分の個性を生かしていくという，そういうことのために必要な力，こんな観点で，いかがでしょうか。

赤岡先生，お願いします。

赤 岡 委 員： 前回の資料，番号２番目を見ますと，基礎となる力（Ａ）が幾つか上がっておりまして，この点について，幾つも私も賛成なのですが，まず，これと少し違うのが１つだけあります。他人の良さとか，他人の辛さとか，悲しみとか，考え方だとか，そういったことを理解する力というのを，ぜひつけてやってほしいという気がいたします。これ，国際社会でいろいろやるときのトラブルのもと，ここが，トラブルを起こさないのはこれですいろんな人々のつらさ，悲しみ，考え方ということを十分理解していることがやっぱり大事だというような気がしますので，国際化のときに動けるように，そういうことをしといていただければと思います。あとは，もうこれだけにさせていただきます。あとは知的好奇心と，それから，今，牛来さんが言われた，意欲を持って努力し続けるにはどうかということについては，次のラウンドのときに，また話させていただきます。

坂 越 会 長： ありがとうございます。

それでは，お願いします。

毛 利 委 員： 私も前回欠席させていただきましたので，そのことも含めて，私のことを，人材ということでお話させていただきたいんですが，先ほど，先生のほうからもありましたけれども，やはり私の周りで，ああ，この人すごいなとか思う人は，やっぱり他人の傷みを自分のこととしてアクティブに持てる人というのがそうかなというように思っていまして，私の子どもが行った高校でも，東日本の大震災のときに，もう二日三日後には，私たちよりも早く，広島の駅前で募金を集めたりとかというようなことを生徒たちがしているというようなこともあったりして，そういうことで，いわゆる感性が豊かであるとか，あるいはフットワークが軽いとか，スピーディーに動けるとか，そういうものをすぱっと決断して持てるような，そういう人間というか，人というのが，やはりこれからグローバルな人材とかというときに非常に大事なんじゃないかなというようなことを非常に強く思っておるのと，それからもう一つ，これまでの議論の中でもあったと思うんですが，自己肯定感とか，自己効力感というか，やはり自分が何かできるとか，仲間と何かができるとか，社会を変えることができるとか，そういうことが非常に日本の子どもたちは弱いというのは，いろんなアンケートとかでよく聞くので，やはりそういうものを育むための教育課程ですか，そういうようなものを何かうまく仕組みとしてつくっていただけるといいのかなというようなことを感じています。

坂 越 会 長： ありがとうございます。

ちょっと関係があって，ほかのところで話をしたんですけれども，三無主義とか，五無主義とか，要するに無気力，無関心，無感動というのが言われて，もう30年ぐらいたつんですよね。でも，なおかつ，なかなかそれが戻ってこないという。それで，また別の人は，今の高校生というのは，もうものづくり，産業高度化とか，それからバブルも

何も知らずに，空白の20年の中しか知らない彼らにどうやって意欲を持たせるのかというような，それこそ社会学者が今言っている話題なんですけれども。

ちょっとすみません，余計なことをつぶやいてしまいましたが，本当にいろんな分野で御経験を積まれている皆さんですので，御自身の経験にかかわってでも，ぜひお願いしたいと思います。先ほどの流れでいいますと，意欲だったりモチベーション，あるいはマインド，人を思いやる心，こういう心を持つような若者になるためのきっかけ，いかがでしょうかね。

はい，お願いします。

武 田 委 員： 武田です。よろしくお願いいたします。

人を思いやる心ですとか，そういったことを身につけさせる，こういったすべての中に，やはり学校教育が持っている力，地域社会と連携をしながらさまざまなことを推進していく，こういったことが上げられるんではないかと思います。学校の中だけではなくて，この資料番号２にも書いてありますけれども，学校の中だけではなくて，学校を取り巻く周辺環境と一緒になってさまざまなことをしていくという，こういったことによって，例えば自分たちよりもっと若い世代，お年寄りの世代，そういった方と交流をしていく。そういったことから，先ほどありましたように人を思いやる心ですとか，そういったものがはぐくまれてくるんではないかということを考えます。

そうしたときに，この資料番号２の１で，「本県を内外から支える人材像」といたしまして，一番最後に「社会に貢献できる人材」という項目がございます。私は，ここはやはり「地域社会に貢献できる人材」と，少し狭義に考えるべきではないかと，このように思いました。当然，教育ですから，最終的には社会貢献できる人材を育成するのが目的になってくると思いますけれども，この在り方協議会で考える中身を，やはり広島県，もっと狭義でもいいと思うんですけども，自分たちのある学校，その周辺の地域社会にどう貢献できる人材を我々は育成していくべきなのかということについて，的を絞った考え方をすべきではないかと，このように思いました。

以上です。

坂 越 会 長： ありがとうございます。

ちょっと，私の問いの立て方で，もう高等学校教育の在り方とちょっと話がずれてしまって申しわけないんですが，まずは「社会で活躍するための人材像」というあたりでも，御意見があったら，ぜひお願いしたいと思います。

はい。

小 村 委 員： 今の御意見ですけれども，高校生が実感できる社会は，まだその地域が視野の範囲だろうと思いますから，トレーニングとして高校生を指導するという意味では，そこは賛成なんですけれども，人はものすごく可能性を持っていますから，その先も伸びていく力を身につけさせるということが大切なんじゃないかと思います。

「基礎となる力」ということですが，私は，ここの能力さえしっかりつけてやれば，必要なスキルというのは，それぞれ必要が出てきたときに，比較的短期間に身に付けることができると思っています。これも私の経験ですけれども，人間はいろんなものが目に入るし，将来への思いや過去の記憶にあるんですけれども，今，ここでしか自分の力を発揮する時，場所はないんだ，ここで頑張るんだという，その覚悟を持つということなんですね。これが人間が伸びていく，一番ポイントになるんじゃないかという気がしております。

私は，運輸省から科学技術庁へ出向しまして，そこですぐにやった仕事が原子力裁判の担当だったのですが，原子力のことも裁判事務も殆ど知識はありませんでしたが，必要に迫れば本当に非常に短い期間で，その仕事に耐えられる程度の能力はつけられるんですね。そんな経験もあって，学校で学んだことがすぐに使えるということは，これだけ高度化された社会には実際にありませんので，基礎のところさえ高校生が身につけていれば，大抵のことは対応できるという気がします。

なぜ体育会系の人間がこれだけ企業から求められるか。例えば，高校や大学でそれ程しっかりした英語を勉強していなくても国際的な仕事をこなしている人もいます。なぜかといったら，そういう立場になったとき，ここでやるんだという強い気持ちを持って努力しているからです。こういうことは，家庭で教えないならば，やはり学校で先生が教えることが必要なんじゃないかという気がします。

坂 越 会 長： ありがとうございます。

はい，どうぞ。

青 木 委 員：　いや，今の，私のことを指摘されたのかというようなお話なんですけれども，高校時代バスケットばっかりやっておりまして，このままでは卒業はおぼつかんのじゃないかというようなことでございまして。ここの基礎となる力を，（Ａ）を全部つらつら眺めさせてもらいましたが，前期高齢者になっても全くこれが実現できてなくて，困ったなと思いながら見ています。

ただ，どこの方とは申しませんが，ある会社員に聞いたら，青木さん，ああ，フランス式葬式いうのがあるんですかというて，葬儀場で，どうしたんかのと思ったら，仏式といって書いてあるのでフランス式と，そのまま。そういったものなんですけれども。あとさらに言うと『シキツギオトウト』と言うので，ええ，何それと言ったら，式次第のことで，すばらしい学校を出た方がおっしゃって，これはどうしたことだろうかなと。ある意味，何が言いたいかというと，基本的な教養といいますか，好奇心を，今，小村市長が言われたようないろんな心構え，バックボーンとなる基礎の教養というのが要るんじゃないかと，つくづく最近思っていまして，私も古典を読んだような記憶はないんですけれども，高校時代のある意味での日本文学の基本的なものとか，歴史とか，そういう基礎教養をきちっとつけさせていかないと困ったことになるんじゃないかなというのを，つくづく現場で見ながら感じておりました。

以前に言葉の教育というのを，たしか県教委がやっておられたように記憶しておりますけれども，言葉の大事さとか，その意味とか，そんなものを含めて，それを聞く力とかいうことも必要になってきますけども，そういう基礎教養をもうちょっときちっと教えてやって，大学が，今，教養部というのがなくなりまして，僕は社会科学だったものですから，生物とか物理とか，いろいろ２年間やらされて，何やこれはと思いましたけれども，後になってみると，ああ，数学というのはそういう意味じゃったんだとか，いろんな形で出てくるものですから，それの幅広い教養というものを高校時代に，段階的につないでいったらいい，きちっとやったほうがいいのかなというような気がします。

坂 越 会 長：　ありがとうございます。

前委員は。

前　委　員：　失礼します。先ほど，坂越先生のほうから三無主義というような懐しい言葉がありましたが，まさに私が高校時代は三無主義だったですね。ただ，私もそれを吹聴していましたけども，今思い出してみるのに，やはり何か，意思のようなというか，自分自身があって，そういうことを言っていたという感じなんですね。じゃ，今はどうなのかというと，その辺が少し欠けるのかなという思いもします。

それで，前回も私のほうから話したのは，やはり，これからどんどんと社会が早いスピードで変化していく中で，いわゆる立場が変わる中で，やはりそういういろんな環境に耐えるというんですか，なじむというか，対応できるというか，そういう力が要るのかなと。ただ，多くがサラリーマンという，つかわれるということでありますし，あるいは起用する人もおって，その辺は立場が違うかもしれませんけれども，やはり，いずれにしてもそういう早いスピードで変化する環境，もちろん人間関係も含めてですけれども，その辺がやっぱりきちんと身につけていってほしいと。そのために基礎・基本というものがあると思うんですね。

私は，子どもは，小村先生が言われたように，やはりそのときに対応することができればいいわけですのでね。身近な例で言うと，私が思っているのは，パソコンがどんどん早いスピードで進化をして，昔は88とか98とかありましたけれども，どんどん早く，そしてＷｉｎｄｏｗｓが出てきたりしましたけれども，そのときにマニュアルを読んで使えるんであれば，それでいいわけですね。ところがそんなのはできない人がいるわけですよ。だから，やはり何かあったときに，必要があったときに，そういうものを自分で読んで理解できる力とか，使えるようになるとか，そういうものがあればいいのかなと。そういう基礎を高校，あるいは大学で身に付けると。

もちろん，高校，大学で頑張ったところで，企業に行ってすぐに使えるとは思わないんですけれどもね。そこでいろいろ研修があったり，いろいろすると思うんですけれども，やはりそういうものを受けたら理解できる，あるいは必要があれば必要なものを探して使えるようになる，そういう力が要るのではないのかなと思っています。そのためにも，やはり身体的な体力と，精神的な体力というのがあるんですけれども，これがないとそういうものはできないのかなというふうにも思ったりしているところであります。

以上であります。

坂 越 会 長：　ありがとうございます。

はい，それじゃ，吉川先生。

吉 川 委 員： 前先生からの，続く話かなと思うんですけれども，前回，グローバルに活躍できる人材ということがありましたし，さっき社会貢献ということもありました。私は，それがいつでも，どこでも，どんな状況でも頑張れる子どもを育てるというように理解させてもらいました。それは外国でも，世界と渡り合う人材であったり，地域にいて，それこそ地域の会社でもって，世界を意識しながら，例えば新しい技術が入るときには，それをきちっと調べて使いこなしていける人材。そして地域においては，老人らの介護とか，小さい子どもたちの子育て支援とか，そういった優しさを持って対応できる子どもを育てることが，いつでも，どこでも，どんな状況でもというようになるんではないかなということで，実は多様性が大切なのかなというように思います。

そういった意味でも，さっき前先生が言われたところの一つにかかわるんですが，私は，小・中学校を預かる者として，粘り強さとか根気強さということが随分必要ではないかなと強く感じております。社会へ出てから３年ぐらいで会社をかわらなければいけないとかいうような状況の子がたくさんいるというふうに聞いていますけれども，やはり，石の上にも３年という言い方がありますけれども，３年間努力をしていくと，そこでは正しい技術が身についたり，人と触れ合いも分かってきたり，面白みも分かってみたりというようになります。そういった意味でも，学校ですることは，僕はやはり粘り強くやれる子どもたちの育成が大切と考えます。そのためには，授業は，やっぱり興味や関心を持つ授業は大切ですけれども，部活なんかも随分大切じゃないかなと思っております。

さっき，新幹線で来たんですけれども，こんなことがテロップで流れてました。厚労省の研究部会が，2030年の就業者人口は845万人減という数字を発表しましたというのが出ました。確かに，2050年には人口が8,500万人程度になるということも聞いていますけれども，そんなときに社会が，それこそ終身雇用でなくなったときに，どのような生活をしていくかといったときに，やはりしっかりと根を張った，いわゆる粘り強さを持った子どもたちを育てる必要というのが大きくあるんじゃないかなと，私はいつも感じています。

以上です。

坂 越 会 長： ありがとうございます。

そのほか。こちらの側のサイドで，ちょっと。それじゃ。

中 川 委 員： 僕，いつも思うんだけど，今の小学生にしても，中学生にしても，高校生にしても，自分の夢というのを持っている子が少ないんですよ。あの辺を何か自分の夢というのを持たせてやれる方法はないのかなといつも思うんですけれども。本当，小さいころまでの，高校生ぐらいになって自分は将来こうなりたんだということが多くて，ああ，この子はすばらしいなという気がするんですよね。そういう子がほとんどいないんですよ。本当，学校を出て，いいとこへ就職して，後の生活が安定してればいい。波風のない，どういうか，スリルのない生活というんですか，そんなので人生を終わってしまうような自分の人生の設計を組んでいるんですよね。やはりもう少し，せっかく生まれてきたんだから夢を持たせるような，いろんなことができる子ができないかなと常に思うんですけれどもね。

僕のことなんですけども，僕は，ボーリングしたら，たまたま温泉水が出たので温泉こさえているんですが，そこに僕の好きな言葉を石に彫って飾っているんですが，「夢は実現するためにある」という言葉を彫っているんですよ。この言葉が僕は好きなんですよね。もう夢というのは，持って，それを毎日努力していけば，絶対これ実現するんですよ。実現しないのは，それが途中であきらめているからであって。僕はいつもそれは思っています。それを持つ子どもがどうやったらできるかなといつも思うんですが，何かいい方法ないですか。

坂 越 会 長： ありがとうございます。

本当にいろんな御意見いただいて，夢を持って努力することだったり，粘り強く，本当に意欲的に周りに働きかけていくという，そういうことが必要だということは，もうだれも異論がないことだし，これから特に必要だろうというふうに思うんですよね。それで，それをどうやって学校，とりわけ高等学校教育で，というのが次の話になってくるのかなというふうには思うんですけれども。

ちょっとこだわったところで，青木委員さんがくしくも言われた，意欲と同時に基礎・基本というか，やっぱりそれを展開できるだけの力も必要。これが教養なら教養。

しかし青木委員さんが言われたのは，教養を勉強したときには何じゃこれはということで。やっぱりここのところが，何じゃこれはと思わんようにするためには，社会での脈絡だったり関係性，牛来さんが最初に言われたようなことも工夫しなければいけないんでしょうし，それから場合によっては，これがいつ，どこで役に立つかわからんけれども，でもこれは要るんだよという仕掛けが必要なのか。主体性等を，ある意味しっかり指導するというか，自分が伸びていく力と，周りからある意味規制される力というのがどっちも必要になるような気がするんですけれども，問題はどういうふうにしようかな。基礎・基本，教養，高校生にとって，ある意味，どうしてもこれは嫌いでもやらなければいけないという御意見に賛成していただける方，何かありませんか。

長 田 委 員： それにずばりということじゃないと思うんですが，最近，特に感じることがありまして。今日，皆さん方から出る意見は，ごもっともことだと思います。

１つは，つくづく感じるのが日本語が通じないと。前にも同じことを言ったと思うんですが，非常にやっぱり会話が下手なんですよね。話を聞く。おもしろくない。だからおもしろい話が話せる人がいないと。高等教育を受けて，大学院生も，もう山ほどおります。これが企業へ入ってもなかなか芽が出ません。表現の仕方がないし，企業なんかは，どの企業も，今，見える化，見える化という感じで，器具を使って，パソコンとか何かで，見える化，見える化ということで物すごく走っているんです。私は，話せる化ということが，まだ大切なんじゃないかなというのをつくづく感じます。たまたま私の周りにそういうトラブルが多いんだと思うんですけれども，子どもさんたちもメールで送るほうが，メールではもうすぐ送るんですけど，話すといったら単語ぐらいしか話せないんです。ここはやっぱり本を読んだりとか。私は，大学卒業してから，社会に出てから，ある一つのきっかけで古典というのにちょっとはまりましてですね。古典もわからないんですけれども，自分で問題意識を持っていたら，やっぱりそれを解いてくれる何かがあるんですよね。そういうことで非常に好きになったと。それと，やっぱり本を読むからいろんな言葉を覚えるということもあって，常にやっておられるんだとは思うんですが，現実，やっぱり話せる化というのは，今後必要なんじゃないかなと。ちょっとピントが違うんだと思いますが。

坂 越 会 長： いえいえ，ありがとうございます。

私の変な限定にかかわらずに御意見いただければと思うんですけれども。

大学の先生，どちらか。教養は今，難しいところですので。

川 野 委 員： 大学で教養教育をしている者にとって，特に音楽大学のような一つの専門性を極める人たちが多いところでは，教養教育というのは非常に教えにくいところがあります。それは，やはり音楽が好きだ。だから，逆に言うと，音楽が好きということで来ているから，そっちではブレないんですよ，これ。そういう意味では。大学に入って，違っていた，やろうとしていることと違っていた，それはないんです。多くの場合，高校までの部活等の吹奏楽であったり，あるいは，時にはピアノであったとしても，マン・ツー・マンのレッスンですね。それで大学に入っても，大抵の人の場合，必ず毎週45分のマン・ツー・マンのレッスンがあります。マン・ツー・マンのレッスンがあるということは，先生と防音の部屋で１対１で対峙するんですね。時には非常に理不尽な要求もされます。あるいは，自分が練習していかなくて，非常に恥ずかしい気持ちでその部屋に入らなければいけないと。それを４年間続けるということは，かなりのコミュニケーション能力がつきます。大学の宣伝をしているようで申しわけないんですけれども。となると，企業の方に言われるんです。エリザベトの子は，しかってもやめないからいいんだと。かなり密度の濃い人間関係を，大学に行っても形成されます。

ただし，問題は教養の点なんです。非常に，先々週の土曜日，エリザベトを舞台に，文科省の大学教育の改革の一つのフォーラムがありました。大学生は勉強しているかと。あるいはどうやって学習時間を確保するかというフォーラムがあり，東京からも文科省の高等教育局長を初め，役員さん，あるいは大学の先生たち，あるいはいろんな学生たちの討論があったんですけれども，やはり，今，なかなか勉強する時間が少ないのか。それは，教養教育とあわせて考えるならば，やりたいと思う専門性のものに関してはかなり熱を入れるんだけれども，やらされている，それも必修でやらされている授業というのは，なかなか熱が入らないんですね。

そこに，やはり自分からやろうと思っているものには強い向学心も出すんだけれども，そこで，やはり視野を狭くしては，今ここに出ている基礎となる力，高校までに身に付ける力なんですけれども，それは大学生になっても一緒で，グローバル化というのは大

学の教育でも同じように求められていることです。高校生にとっても，やはり同じように，考えるというのは，嫌でもやらせなければいけないものというのは当然あると思います。それがないと，最終的に，やっぱり自分の好きなことだけ極めたのでは専門家として成長しません。音楽でも，最終的には作曲者の生い立ちから，あるいはその作曲者の背景から，あるいは外国語で直接理解するようになって音楽を理解するようにならなければいけない。とするならば，嫌でも外国語もしなければいけないし，あるいは地理的な勉強，歴史的な勉強，あらゆることをしていかなければ本物の音楽家にならないと言われています。

だから，それはなかなか，大学１年生の授業を，与えられた状況ではわかってもらえないんですね。それをわからせるには，やはりだれかが導く。例えば著名な各界で活躍している先輩の音楽家を呼んでくるだとか，世界的に活躍している人，あるいは先生方，いい先生に恵まれるとか，そういう人たちにやっぱり気づかさせてもらわないといけないんじゃないかなと。このやっていることの大事さというのを気づくことによって，やっぱり自分から勉強しようと思うスイッチが入らないことには，どうしてもいい学びができないような気がするんですね。そして，自分からやろうと思うスイッチが入らないと学習時間の確保はできないと。この前のフォーラムを聞きながらも，フォーラムはやっぱり，パネラーの人が優秀な人ですから，いいことしか言わないです。でもそうじゃない，大多数のなかなか勉強に臨めない人たちのやる気を，スイッチ入れるというためには，やはり，今までも出てきましたけれども，指導者，あるいは各界の先輩との接点というのが要るんじゃないかなというふうに思いました。

坂 越 会 長： ありがとうございます。

川野委員さんの話を聞きながら，これ，高校生と大学生と一緒にしてはいけませんけれども，先ほど御紹介があったフォーラムの中でも，実態として，本当に大学生の本心，本音のところで言えば，大学に普通に勉強しに来ているというんじゃなくして，行けと言うから来てるし，同世代のあの子もこの子も，周りの子が大学行くからそこにおるという実態は，確かにあろうと思います。高校，これはぜひ，事務局にまたいろんな無理なお願いするんですけれども，今日委員の皆さんにいろいろいただいているような，こういうふうになったらすばらしい，これは必要だ，もうこれは本当に皆さん一致するところがあるんですけど，実際，それじゃ，98％の子どもたちが行っている県内の高校，これは次からの話になりますけれども，彼らは何をもって高校に来ているのか。今，彼らの思い，心はどうなのかという部分を押さえないと，余り空中戦やってもという気がしてきたので，ちょっとまた，そういうデータとかがあれば。また，そういうチャンスがあれば，お願いしたいというふうに思います。

まず，第１セッションはこれぐらいと思うんですが，もし，もうここでちょっと御発言をという方がありましたらお願いします。

赤 岡 委 員： すみません，２回目でございますけれども。

坂 越 委 員： はい，どうぞ，どうぞ。

赤 岡 委 員： 今，川野先生が一流のものを見せたり聞かせたりという話がありました。教養の話でしたが，これに関してです。私が，小学校のころのことです。小学校の先生の家に行きますと，1950年ごろですね，行きましたらパーコレータがありまして，コーヒーが「ぶぶぶっ」と，その文化には憧れましたし，それからいい音楽を聞かせてくれてそれにも憧れます。

それから，中学校の先生が，よく，いい詩を，何かのときに，朗読してくれるんですね。これにはかなりひかれまして，私も今は何かの機会あるごとに詩を暗唱するんですけれども，萩原朔太郎だとか，それから茨木のり子だとか，それは前勤めていた大学でもそうですし，現在の大学でも学生たち，割合喜んでくれまして，あの詩，もう一回朗読してほしい，というのを時々言います。だからそういうのを朗読，別に暗唱しなくていいわけですが，伝えていただけるといいのだがと思っています。一流の詩というのは，特に本当に短い言葉で感動を呼ぶ，物すごい力がありますので，お話しさせていただきました。

それから，せっかく広島にはひろしま美術館があるわけだから，あそこへ行ってみたら，一流の，もう見たら何人かは必ず感動しますので，ぜひそういうようなことをということです。

坂 越 会 長： ありがとうございます。

本当に根本的な，まず，これまでのお話も勝手に集約させていただきますけれども，

やっぱり根本的な部分というのは，その人の人格力であったり，意欲であったり，取り組む力，あるいは粘り強さ，態勢，タフに取り組んでいくという，そういう姿勢の部分ですよね。こういう姿勢をどうやってつくっていけばいいのかという，そういうことが次の課題になるだろうということは一致していると思うんですよね。若干，そのあたりの手がかりというのを出していただいたのが，先ほどの御発言のように，本物，あるいは一流のものと接すること。高校の学内に限らずに，学校内に限らずに，外での接触，あるいは社会，実社会，企業，そういったところといろんなパイプを持って，学ぶことの意味づけを少しでも生徒たちが感じられるようにしてやること，そんなような御意見があったんじゃないかというふうに思います。もし，また補足がありましたらお願いいたします。

協議２　高等学校教育の目指す姿について

坂 越 会 長：　協議題の２のほうなんですけれども，そういう人材像，あるいは身に付けるべき力，こういったものを高等学校教育としてどういうふうにつくっていくのか。高等学校教育というものがどういうふうに目指して，何を目指していけばいいのか。前半の，「本県を支える人材の育成」，「今後の高等学校教育の在り方」というのが基本的な前半のテーマなんですけど，そのうち人材と身に付けるべき力というのをお話しいただいて，この後の時間で高等学校教育のあるべき姿といったことについてお話をいただきたいと思いますが，資料の確認で，資料番号２の２枚目のほうに，これまでいただいた御意見のうちから，高等学校にかかわるものとして，こんな形で，先ほども出ましたけれども，やっぱり基礎・基本，教養が大事である。他者とのかかわりが大事である。それから，こういう観点もぜひ必要なんですけれども，高校生，本当にいろんな環境，条件の中で学校に通っていて，いろんな困難も当然にある。彼らがいろんな状況に対応できるような，そういう学校教育の在り方，こういった御意見があったかと思います。このあたりにつきまして，高等学校教育がなすべき，既に上がっているものを含めて，御意見をいただけたらと思うんですけれども，いかがでしょうか。

　これも，もう最初に皮切りということで，中学校から望まれることあたりを，まず，いただけたら。

佐々木委員：　はい，失礼します。先ほどからちょっとお聞きしていて，実は中学校の位置というか，ポジションというのは，本当に重要だなというのを痛感しております。高等学校に望むものという，その以前に，やはり中学校，義務教育という――前回の話で義務教育というところにちょっと特にこだわったんですが，すべてが進学するわけではありません。先ほど98％という数字がありましたが，実は２％というのはその中に入っておりませんので，やっぱり中学校教育で人格完成というか，どういったものを目指していくかというのは，非常に重要だというふうに思っております。

　先ほどの話にちょっと関連するんですが，私，今，３年生に一人一人ちょっと面談をしているんですね。進路について，どう，という話をしています。そうすると，校長職をしてずっとそれをやっているんですが，以前は即答えが出てきたんですよ。どういう答えかというと，お父さんのようなことをやりたいとか，具体的なものがすっと出てくるんです。面接なんかでもそうなんですが，聞いたら，尊敬する人だあれと言ったら，父親とか，母親とか。じゃ，何でだと言ったら，一生懸命しんどい中で自分を育ててくれているというというようなところで，本当にこれ，親に聞かせたいなという印象はあったんですけども，だんだんそれが減ってきているんですね。

　ついこの前，事前に面談のところの項目を書くんです。どういうことを書くかといったら，夢があるかとか，それは何なのか。それと，必ず自分が自分で褒めてあげられるところは何なのかというのを３つ書いてごらんというのを書くんですね。全部が埋まる生徒と，そうでない生徒がいます。いわゆる，先ほど自己肯定感とか自己効力感というのが出ましたが，私はそれも非常に重要なポイント，キーワードだというふうに思っていまして，要するに，やる気，モチベーションが出てきたら，あとはもう本人が走っていくというふうに思っています。そういう意味では，そういった機会を幾らかでも見つけさせてやりたいなという気がしているところです。

　そのためには，私も，先ほど川野委員さんが言われたように，子どもたちにも同じことを言います。広島というのは本当に近いんだから，電車賃，バス賃だけで，すぐ本物

が見れると。美術館もそうです。音楽もそうですね。広響さんもそうですが，私は，１年間とは言いながら，１回しかないんですけども，とにかく以前は卒業するまでの３年間で１回は本物を見よう，聞こうということで。今は１年間に１回にしています。昨年も広響のコンサートマスターの田野倉さんにおいでいただきました。ことしはパーカッションのオグラさんという方に来ていただいて，とにかく生を見ると。これは本当に市のほうにも感謝したいんですが，すぐ近くに西区の区民文化センターがあって，午前，午後で，それぞれ１，２年生と３年生というふうに２ステージでやっていただいた。これをまた文部科学省のほうが，芸術鑑賞行事ということで支援をしていただいているということで本当に助かっています。そういう意味では，いかに本物に触れさせていくか。

それで，その中で本当に，100人の中で１人でもいいんです。田野倉さんが，バイオリン習っている人，というふうに３年生のときに手を挙げさせたら，たった１人しか手を挙げなかったです。私は，１人でもいたということがすごいなというふうに思ったんですね。なぜかというと，その子が次にクラスに帰ったり，部活であったり，そういったとこで必ず光を放ってくれるんですよ。それを期待してるんです。その辺は，高等学校が目指すべき姿ということで，ちょっとつながりが薄いかもしれませんが，やはりモチベーションというところを，何とか中学校のときも持たせてやりたいなと。

そういう意味では，学習，授業の中身も，やはり考えて答えるとかですね。高等学校あたりも，今もあるんだろうと思いますが，ディベート甲子園というのがあるんですね。４人，５人で組んで，行くまで課題は，賛成派か反対派かというのを言われないんですね。その場で何時間か前に，はい，テーマはこれです，あなたはじゃあ賛成派の立場で言ってください。そのために参加するその生徒は，以前読んだときには，１人が大体100冊の本を読破するんですね。どっからつつかれてきても，賛成の立場で，反対の立場で，こういうデータがある，バックデータがある，こういう事情があるというようなところがぱっと言えるようにですね。これはすごいなあと思います。やっぱりそのモチベーションは何かというと，そこへ参加して，優勝するというか，評価されたいというのもあるんだと思うんです。そういう力があれば，すごい力を子どもたちは持っているんじゃないかなというふうに思っています。ちょっと的外れなことで。

坂 越 会 長：　いえいえ，ありがとうございます。

先生，またもう一回返して申しわけないんですけれども，そういう活動だったり，本物に触れ合うということが本当に大事だと思うんですよね。しかし，日常，毎日毎日の学校の中，毎日顔を合わせている教員と生徒，そのあたりでの何か工夫というか，日常の中で生徒たちに意欲を持たせたりなんかというものは，何か考えられないでしょうかね。先ほど，授業ということで，考えさせる授業というお話はいただいたんですけれども。

佐々木委員：　実は，私も教科は数学なものですから，例えば私は，中学校の１年生で，最初に教科で数学の授業をやるときに何をやるかというと，「１＋１＝２」というのをまず書くんですね。「１＋１＝８」というのも書きます。「１＋１＝１１」というのも書きます。これを何種類かだあっと書いて，これは全部正しいんだよという話をします。それとか，新聞紙のスポーツ欄ですね，その中の，特にカープが活躍したというようなときがちょうどチャンスなんですが，新聞の中の数字を全部消すんですよ。全部消して，それを印刷して子どもたちに渡してやる。きのうの試合はすごかったねえと，だれが打ったんだ，何番が打ったんだ，打率どうだったんだ，得点は何点だったか，一切わからないですよね。いわゆる数字ってどれぐらい大切なんだよというところを，やはり自然科学というのは，日常の社会を介してやらないと価値もわからない。先ほどの１＋１が２というのは，本当にもう閉じた社会の中なんですよ。１＋１が1,001にもなるんですよね。１＋１が366にもなるんです。これは理念上考えたらすぐわかることなんですよ。それを子どもたちの中で何人かはわかるんですね。そしたら堰を切ったように，じゃ，これはこれだ，これはこれだというのをだだだだーっと上げていくんですよね。そういう意味では，持っていき方というか，関心を持っていくという方法というのも，すごくやっぱり教師の力として問われているなという気はしますね。

坂 越 会 長：　いや，無理な質問をしてすみません。ありがとうございました。やっぱりお話伺いながら，数学なら数学というか，今後，ああいう面白さですよね，なぜこういう数字がこうやって成り立っているのかということを，やっぱり，これ大学も基本的に一緒で，教養というのは面白くないと言われるんですけれども，その教養の世界で学問の窓口ですよね，これをやっぱり見せてやらないと，大学生でも食いついてきません。いうことは

ありますが。

すみません，指名して。加藤委員さん，保護者の目から見られて，子どもたちがこういうふうに変わっていくような，そういう，もし御経験でも知見でもありましたら，お願いいたします。

加藤委員：　今，すごく我々は夢の部分の話をしているんですが，学校に今行きますと，中学校のことなんですけれども，小学校，中学校，高校というこの枠組みも，県立広島高校，中高一貫ですよね。やっぱり中高の在り方というのも大事かなというふうに思うんです。というのが，中学校は，小学校のときはすごくいい子なんですけれども，中学校に行くと，結構サル山状態になるような学校が何校かあるんです。残念なことにですね。授業のチャイムが始まっても動き回っているとか，授業を受けてやってるんだみたいな感じの。そんなひどい中学校とか高校とか，皆さん見られることはないかもしれませんけれども，私はよく目にするので。ああいう子どもたちが，そういう落ちついた環境になれば，自然に伸びていくんじゃないかなというところも感じます。

何でそんなに大人に対して不信感を持っているのかなというところで，今さっき話をされていた，一流の先生の話を聞きたいというところもすごくあるんではないか。世界のトップ，日本のトップで行かれているようなところを見せてやる，大人のすごさを見せてやる。だから子どもたちになめられ切っているんですよね，そのサル山状態の学校というのは。そういうところもぜひ必要だろうなというふうに思います。

それからやっぱり，今，好きなことばかりという話も先生されていらっしゃいましたけれども，やっぱりおじいちゃんもお父さんも自分も，同じことを高校で習えたよというような学問というのも必要なんですよ。例えば古典というものがありますよね。わけもわからずに暗唱しているものでありますけれども，そういう教育というのもすごく大事なんではないかなと。どこまで一般教養というところを身につけなければならないんだろうかということをすごく感じます。というのが，例えば高校ぐらいで勉強していることを実社会で使っているかといえば，ほとんど使ってないことのほうが多いかもしれないと思いまして。でも，おじいちゃん，お父さんと話していると，こういうことは一緒に習ったよねって，３世代で何か話せるようなことをしっかり身に付けるということが一般教養なのかなということも感じたりはしました。すみません，まとまりませんが，以上です。

坂越会長：　ありがとうございます。

そのほかに御意見をお願いしたいと思います。

二見先生。

二見委員：　それでは，小さい町の中にある高等学校というイメージで，武田委員さんが，社会に貢献でなくて，地域社会に貢献できるというような，狭義の地域社会という言い方をされたんですけれども，これからどんどんと生徒が減少し，それぞれの県立高等学校も規模縮小，いろんな意味での規模を縮小せざるを得ない時代に入ってきたと思うんですね。そういう中で過去を振り返ってみれば，いわゆる職業学校といいますか，専門教育をやっていた学校も減ってきたし，統合も総合技術高校のように総合化されてきたりとか，いわゆる専門的な教育を受ける学校は減ってきた中で，皆，普通科というような状況になってきて，その中で育ってきた者が，じゃ，将来何するかというときに，普通のという感覚でしかなくなっていると。具体的に自分の目の前の地域の職業であるとか，産業に目が向けられないような状況があるんじゃないかなと。普通科に専攻した中で，結果としていうんじゃなくて，因果関係のあるなしにかかわらず，子どもにもそうなっている。

私は，以前，外国の学校を視察したときに，ヨーロッパで今でもあると思いますけれども，いわゆるギムナジウムという具体的な職業を目標にした学校がありますけれども，例えば，わずか二，三万人の人口のまちの高等学校に自動車の学校があって，その学校ではトラクターや軽トラックのようなものを，地元の故障した車を引き受けて直して貢献していると。その中で自動車のメカニズムを勉強する。あるいは，ホテル学校のような形で，実際に学校でホテル業務を学んで，接客や料理やというものもある，ベッドメイキングみたいなのもある。今までの普通科の高等学校が，職業体験ということでインターンシップのようなことをやっていますよね，数日間。そういうようなことを，具体的な卒業後の目標として日夜勉強しているんです。これは一般教養が必要だというところともリンクするんですけれども，そういうのは一般教養をしっかりと持った上で，自分たちが，地域の産業やいろんなものに対して具体的な目標を持てるようなこと。これ

から，普通科，普通科と言っていると，目標が逆になくなるんじゃないかなと思っています。

それともう一つは，某テレビ局がよくやっていますけれども，スポーツの，体育会系もですが，マーチングバンドとか吹奏楽で，最後は全国大会を目指して頑張っている様子を，長い時間にわたって頑張っている高校生の姿，これに感動するようなのが今よくありますけれども，どの子も甲子園のように，野球の甲子園のようにてっぺんを目指してやっていきたいというものを持っている。そういうふうなものがなかなか，いろんな部活動の中で日の目を見てないというのがありますけれども，もっともっとそこらあたりを，子どもたちが頑張っている姿を広く県民にわかってもらえるような，わかるようなことをしていくことも，私は今から必要なんじゃないかと。ますます，これから小さな学校でやっていることが見えなくなってくる。あるいは，高校生でも，一部のスポーツや文化・芸能だけが取り上げられていたんでは，やっぱり非常に選択の幅が広がって，バラエティーに富んで，今，高校の生活の中で，ごく一部しかそういうことがないというのは，やはり意欲の面からも欠けるんじゃないかなというふうに思うんですね。そういう点で，これから高等学校というか，私は，もっと地域のいろんなものに目を向けて，それと一緒にできるようなことというのが必要なのかなということを感じました。

以上です。

坂 越 会 長： ありがとうございます。

本当に，私の住んでいる間近で西条農業がありますけれども，本当に今言われたような地域のことについて，高校生たちがいろんな活動をしておりますよね。ああいうのはすごくいいなあという目で見ているところでした。

いかがですか。

冨 永 委 員： 高等学校で身に付けるべき力，そしてまた高校教育が目指すべき姿，既に皆さん，ほとんど議論，出尽くしたような感じを私は持っております。ほとんど同感かなという思いがいたしております。

そうした中で，私は，先ほど夢という話もありましたけれども，目標と言いかえてもいいかもしれません。高校生が目標を持って，その実現に向けてチャレンジをしていくと，そういう教育をぜひやっていただければと思うのは，まさにもう本当に夢であります。希望であります。とはいえ，それぞれの高校には，さまざまな能力，個性，適性といいますか，あるいは生活環境を背景にした生徒が学んでいると思います。すべてが同じようにいくわけじゃありませんので，さっきもありましたけれども，そういった生徒が，将来，あるいは高校生のうちかもしれませんが，よし，これをやろうと，これに挑戦しようという気持ちを持つときに，それがかなうような基本になる，まあ以前にも申しましたけれども，基本的な，基礎的な力を，まずこれは強制的にでも，英語も，数学も，国語も，歴史も，やるべきことはきちんとやっておくということが，私はやはり必要であろうというふうに思います。重なった話になったと思いますけれども，とりあえず以上です。

坂 越 会 長： ありがとうございます。

砂原委員さん，このあたりのことについて。

砂 原 委 員： すみません。先ほどからさまざまな意見が出て，その中にどうやって意欲とかモチベーションを高めていくかというふうな話もあったかと思いますが，子どもたちって，自分のやっていることが，こういう場面で役に立っているんだとかいうのが実感してわかったときには，それが意欲につながるということです。

これは，ある高等学校のブラスバンド部の話なんですけれども，その部員が顧問から厳しく鍛えられて，何で自分はここまで先生から言われなくちゃいけないんだというような思いがあった生徒が，地域の老人ホームの慰問の活動で演奏をした。そのときに地域のお年寄りの人が，すごい演奏だというふうに褒めてもらえた。その自分の今まで積み重ねてきたことが，こういう場面で役立つんだ，地域の人から認められているんだということが実感できたときに，その生徒は今までの自分に対して厳しく指導に当たってきた教師の意味がわかってきて，そこから後は簡単で，非常に練習に臨む姿もがらっと変わってきたという。そういう意味で，徹底的に鍛える場面，ちょっと徹底的というのは厳しい表現かもしれませんけれども，すべての生徒にきちっと指導する場面と，そして，その頑張ってきたことを，成果を発表する場，そういったものを，きちっと高等学校教育の中で，学習活動の中で位置づけることが大事かなというふうに思います。

特に，先ほどの議事の中で，基礎となる力（A）というのは，これはすべての高校生

が身に付けるべき力ですから，これはある程度は教室の中で教科を通して指導できる，学べる力であろうと思います。しかし，基礎となる力の（Ｂ）のほう，社会で活躍できるために身に付けるべき力というのは，高等学校側のほうで，ある程度特別な場面であるとか発表する場を，機会を用意するとか，そういった工夫というものが要るんじゃないかなと思います。そういう意味では，各学校が，地域の実態に合わせて特色づくり，県のほうでも既に各高等学校の特色ある教育づくり，随時進められていますけれども，それをより一層進めていく必要があるのかなと思います。

それで，広島にはさまざまな，培われたものづくりの技術であるとか，伝統文化であるとかといったものがあります。そこをいかに，そういう高等学校の特色づくりの中に，いかに地域の特性といいますか，それを結びつけていくか，そこが大事なのではないかなというふうに思います。例えば，広島市で言えば，さまざまな文化があります。例えば上田宗箇流の茶道であるとか，漆の高盛絵であるとか，それから宮島彫りであるとか，市の近辺で言えば熊野の筆であるとか，そういった地域の産業・伝統。それから，聞くところによりますと，銅蟲というものが300年前にあったんですけれども，銅の板をたたいて，いろんな，食器であるとか，花瓶であるとかをつくる，そういった銅蟲というものが，今，後継者がいなくて消えかかっていると。

そういったところをいかに高等学校の，例えば広島市で言えば，創造表現コースであるとか，あれは市立工業のほうでそういったものが学習活動の中に取り入れられないだろうかとか，そういったことも考える必要があるかなと思いますけれども，いずれにしても，一つの特色ある高校づくりの中で基礎となる力（Ｂ）というものは育っていくのではないかなと。そのときに地域とか，歴史とか，伝統・文化とかといかにつなげていくか，大事なことではないかなというふうに思います。

以上です。

坂 越 会 長： ありがとうございます。

先ほどのお話，特色というあたりにつながるかなと思うんですけれども，私といいますか，これから，この協議会の進める，もう１つ広島の高校の在り方を考える前段として，今から言うようなことでちょっと御意見を伺いたいという論点が３つほどあります。ちょっと端っこにでもメモしていただければと思うんですけれども，まず１つは，文化とかスポーツ，やっぱり高校スポーツだったり，あるいは高校芸術，文化祭というのも大きな高等学校教育の柱だろうと思いますので，そういうものについて，特にすぐれた，そういう力を発揮できるような，そういう若者を育成するための方策なりお考えなり，あるいは必要性なりということについて，まず１点御意見を伺いたいというふうに思います。

それから，２つ目は，理数科，あるいは科学技術，スーパーサイエンスというような試みもあったりしますし，広島県のほうでも科学オリンピックの県内版というようなことを企画されたりしているんですけれども，なかなか子どもたちが，今の子どもたちがとっつきにくい理数科の分野について，あるいは科学技術の分野について，高等学校としてどういうふうに取り組んでいったら何か道が開けるのかというような観点で１つ。

それから，これは最後にお願いしようと思うんですけれども，こういうスポーツにしても，科学文化にしても，ある意味積極的に頑張って打って出ているほうなんですよね。ただ，やっぱりさっきから何回も言っていますように，いろんな子どもたちが高校に来ていると。そういう中では，なかなか，しんどい子どもたちというか，なかなか高等学校の生活になじみにくい子どももいるでしょう。それから耐性，タフさの裏返しですよね，最近ではストレス脆弱性なんていう言葉を使ったりするんですけれども，傷つきやすい，あるいはへこみやすい，なかなか友達をつくりにくい，そういう子どもたち。もちろん，そういう精神面だけでなくして，いろんな経済のこともあるでしょうし，ケアを必要とするような，いろんなニーズ，支援のニーズを必要としているような子どもたちは，今どういうところが問題なんだろうか。あるいは，高等学校教育として，そういう子どもたちに，これはちょっと本当に大変な大きな問題なんですが，高等学校教育としてどういうかかわり方が望ましいんだろうか。

以上，その３つの観点について，順番に御意見をいただければというふうに思います。すみません，いきなりの振りで。

まず，スポーツ・芸術なんですけれども。はい。

小 村 委 員： すみません。直接の今の設問に対する答えじゃないんですけれども，高等学校には98％進学するということでしたね。それで，高等学校から大学に進学する生徒はどれぐ

らいいるんですか。４割ぐらいですか。

坂 越 会 長： ５割です。

小 村 委 員： ５割ですか。そうすると，高等学校でやるべきことというのは，一つは大学へ進学するための通過点，即ち大学で勉強するための基礎として身に付けるものがある。

それから，それも含めてですが，やっぱりここまでで，中間決算をしておく必要もあると思うんですね。一番思うことは，人格の基本みたいなものは，実は高等学校くらいまででほとんどできてしまっているんじゃないかという気がするんです。この年齢になって，たくさんの同級生に会いますが，職業は皆違えども内面は余り変わっていないんですね。

したがって，高等学校までで，ある程度中間決算的な完結をしておかなければいけないという気がいたしまして，これを一緒に論じていいのかなということが基本としてあるんです。専門の中では高等学校の学力だけで通用するという世界はほとんどありませんからね。理数系の場合は，もう大学でもだめで，今は大学院に行かせないと，企業の中で対応する能力というのは難しくなっているんですね。そういう意味では，大学へ行って勉強する，その専門を学ぶための基礎をつけてやるということですね。これだけみんなが高校へ行くんですから，分けて考えなければいけなんじゃないかという気がします。

それから，現実にはケアを必要とする子がたくさんいます。生徒だけじゃなくて，先生のケアがものすごい必要になってきているんだそうです。うつで休む先生がとても多くて，これをどうするかというのは行政上も大変大きな問題になるぐらいでして，ケアはしなければいけないんですけれども，どんどんタケノコのように出てくるものを，一つ一つ対処できるんだろうかという疑問もありましてね。むしろ，一時的にはすごい乱れるかもしれませんけれども，余りに子どものときから手をかけ過ぎるからこんなことになっているんじゃないかという，そんな気がするんですけれども。あと２つはまた考えておきます。

坂 越 会 長： はい，ありがとうございます。難しいですね。自立を促すためにケアをし過ぎてはいけないし，かといって突き放しすぎるというのも。

それじゃ，すみません，お願いします。

吉 川 委 員： ケアということで，確かにそういう思いもないでもありません。例えば，子どもたちに本当に丁寧に対応していくことによって，失敗も知らない子どもたちが随分増えておるというような状況です。小さな失敗は学校の中でたくさんさせなければならないんじゃないかなと，私は義務教育を預かりながら思っています。ですから，ヒザぼうずをすりむくような体験は必要ではないかなと思っておりますけれども，今，そのような小さな怪我もしない，させないようになっています。ケアというのではないかもわかりませんが,小さな怪我を通して学ぶこともあろうかと思います。

そういったものを持ちながら，一方では一つ一つの小さな成功体験をたくさん積ますということが，高校生に成長したときには大きな成功体験につながるんではないかなと思います。

実は先日，オリンピックの平岡選手とお話させていただくことがあったんですけれども，平岡選手に,「あなたにとって，夢だったオリンピックが目標に変わったのはいつですか」と聞いてみたら，高等学校のときにインターハイで優勝したときに，次のオリンピックに出られるんではないかなというようなことを自分で頭の中にイメージしたと言ってくれました。ぜひ，オリンピック初日，頑張ってほしいんですけれども。

そういう話を聞いていると，やはり小さな成功体験を積み重ねていくことが，一つの夢の実現につながっていくんではないかなというふうなことを思います。その間には小さな挫折はいっぱいあるんだろうと思うんですけれども，それを一つ一つ乗り越える体験というのが，私は大切になってくると。そういった意味でもスポーツとか，部活などそういったものは多いに役立つんではないかなと思います。スポーツを一生懸命できる子どもたちというのは，やはり授業，45分，あるいは50分きちっと席に着いて勉強できるというようにつながってくるんではないかなと，考えております。授業では，教師が内容を工夫して，今日はこのことが解決できましたね，このことがわかりましたねという授業を積み重ねていくこと，それが確実な成長につながるんでないかと思います。

坂 越 会 長： ありがとうございます。

古賀委員さん，もっと話題は広げてもらっていいんですが，まずはＳＳＨ高校として，理数科のことを皮切りにお話しいただけませんか。

古 賀 委 員： はい。御指名ですので，理数教育に関することについて，現在取り組んでいることで，もし御参考になればということをお話し申し上げたいと思います。

広大附属高等学校は，９年間，国の文部科学省の研究開発校指定ということで，ＳＳＨ，スーパーサイエンスハイスクールという指定を受けております。県立では国泰寺高校さんとともに，ほぼ同じ時期から仕事をしているわけですけれども，今年度は安田さん，それから西条農業高校さんも新たに指定に加わりましたので，横の裾野の広がりがこのＳＳＨに出てきていることは，非常に御同慶だなと思っています。

その先発部隊の一校である我が校で，具体にどういうことをしているのかということを，ここで皆さんにお示ししたいと思うんですけれども，基本的には，ＳＳＨの理念そのものが，将来，我が国の技術者，あるいは科学者を育成するために必要と目されるような中等教育，つまり高校教育段階においてやっておくべきことを開発しなさいと，カリキュラムを開発しなさいと。まあカリキュラムだけじゃありませんけれども，我々のところが手がけているのは，とりわけカリキュラム開発ということをやっているわけであります。したがって，新しい新設科目というんですか，これは国の法令に基づく，いわゆる学指指導要領というのがありますけれども，これに拘束されずに，新しい発展的な，そういう科目を立てることができますから，いろんなことを取り組んでいけるわけです。

例えば，具体的に申しますと，発展的な授業の中に，課題研究であるとか，あるいは数理科学解析であるとか，いろんなものがあるんですけれども，新設科目の中で。先ほどの各委員さんからの御発言とも共通することは，一流のというところがやっぱり共通するなと思って聞いておりました。つまり，例えば高等学校の物理や化学の先生のレベルにとどまらないで，大学の，しかも，それも全国的な著名な大学の研究者等を呼んで，その先生方に講義をしていただくと。また，あるいは，そういう先生方のお膝元まで行って話を聞くというふうなことをやっています。これもなかなかお金のかかることでありますけれども，幸いなことに本校は非常に長い歴史と伝統を持っていますから，本校卒業で，先ほど申しましたような著名な大学のスタッフになっているＯＢもたくさんいますから，そういう人づるというんでしょうか，実費だけで引き受けてくれるような，後輩の育成のためによろしくお願いします，日本国の発展のためによろしくお願いしますとお願いをして頼み込んでやっているようなところです。もう一回申し上げますけれども，そういうトップクラスの，いわゆる一線の研究者，技術者とタッグを組んでというんですか，協力をいただいて開発をすると，カリキュラムを開発するということをやっております。

それから，それはあくまでもうちぐらいの話でありますけれども，理数系の場合は，ほとんどがやっぱりもうインターナショナルグローバルです。したがって各論文も全部英語等を中心として書かなくてはならないということがありますから，当然外国の学校とも交流を持って，外国の，例えば韓国であるとか，あるいはドイツであるとかいうふうなところの，いわゆる高等学校，彼の国のほうの，やっぱり同じような理数教育に特化したような学校との交流をしながら，向こうの学校の生徒と共通の授業を，班を構成して，そして各班ごとでディスカッションを英語で交えながら，そういう教育を，授業ですね，彼の国の先生にしてもらうと。行ってですね。あるいは向こうからこちらに来て本校の教師等がやるというふうなことで，もちろん，これは化学であるとか物理の授業を外国語，英語でやるわけです。

そういうふうな，ある意味ちょっと特殊というんでしょうか，あるいは非常に専門性の高いというんでしょうか。したがって，前回もお話をしましたけれども，すべての高等学校で，じゃ，附属がやっているようなことができるんですかと。いや，裾野が広がることはもちろん結構なことで，すべての学校がやれるようになれば，こんな理想はないでしょうけれども，しかしそれは現実的ではないんじゃないのかというのが，正直，私の個人的な意見です。したがって，附属でやっていることを，どれだけ一般の県立の高等学校で具現化できるのかということは，課題はありますけれども，しかし，できる学校は当然あるだろうと思います。現実に，例えば国泰寺さんなんかやっているわけですから。そういう学校での裾野を，１校から２校，３校と広げていくような方向性というのは，理数教育においても必要ではないのかなと私は思います。

あくまでも，すべての高等学校にこの話を振って，考えろと言われれば，課題があるなというのが率直な意見でありますし，それから，今日の議題の中にも少しこれはずれますけれども，最初のところで基礎となる力（Ａ），すべての高校生と，こう言っていま

す。それと基礎となる力（Ｂ），これは個々の状況に応じてと言っていますから，これを，読み方がもし間違っていなければ，これはすべての高校生ではない可能性がありますよね。個々の状況に応じて個人によって差があるというふうに読めば，すべての高校ではない。これを拡大解釈すれば，すべての子どもではなくて，というふうなところを読みかえて，すべての学校ではなくて，というふうに変えれば，学校によってはやるべきこととやらないこと，つまり濃淡，強弱というものをある程度受忍した形で基礎となる力を想定されているのか，どうなんだろうかなというふうな思いで私は読ませていただきました。

もし，私のような後者の考え方であるならば，３番目のすべての高校教育が目指すべき姿も，これもすべての高校教育が共通して目指すべき姿というふうに読むべきなのか，あるいは，それを前提としながらも，プラスアルファで個々の高校教育が目指すべき個別な姿を特化して考えるということと，二段含みでこの３番目を理解して，今後議論を進めていくべきなのか，このあたりはちょっと私なりに理解ができなかったもんですから，これは質問もかねて，高校教育が目指すべき姿というのは，すべての高校が共通して目指すべき姿なのか，あるいは，個々の学校が個性を発揮して目指すべき部分が個別にあっていいものを受忍する形のそれなのか，このあたりをちょっと御説明いただければありがたいなと私は思います。

というのは，いただいてありますこの中教審の高校教育部会の資料の中には，同じような文脈でコアという言葉を使っているんですね。コアというのは，すべての高校です。これはもう間違いなくそういうふうに位置づけています。ところが，コア以外のところについては，この文脈を読む限りにおいては，私の理解と同じなんですね。すべての子どもではなくて，やっぱり子どもの適性や希望，進路に応じてというふうに言っている実例を幾つか挙げていますけれども，やっぱりその中には，先ほど申しましたＳＳにかかわるような，そういう能力の部分も育成する必要があるというふうに言っています。あるいは芸術・スポーツの特別な能力の育成ということも言っていますから，結局このあたりを膨らませていけば，やっぱり学校の特色化によって，学校によって違いのあるような，そういう能力の育成を特化して考える必要性も一方であるようなことを，何か示唆しているような気がしてならないんですけれども。これはあくまでも質問です。私の理解がもし間違っていたら教えてください。

坂 越 会 長： 質問というか，もう質問しながら，自分が答えを探しておるという話でありますが。

すみません，事務局にお願いがあるんですけれども，理数科，もし今，ここでちょこちょこっと相談して，ある程度情報が出せるんだったら，県立の中で理数系コースとかありますよね。あそこの今の状況というのがどうなのかというのを，もし，ちょっと情報提供……あ，それじゃ，前先生に後で振ります。

じゃ，二見委員さん。

二 見 委 員： 理数科高校ということなんですけれども，その前段として，我々中学校，あるいは義務教育レベルでも，やはり将来の科学者をどう育てるかという視点は必要だというふうに思っているんです。実は，私のまちは，今年度から，ＪＳＴという日本科学技術振興機構の応募をして，今始めている。私のまちに将来の科学者がいないかもしれない。しかし，私は，今の普遍化という問題として，やっぱり高等学校を取り巻くことも可能性という点で思っている。まず，私たちが，今，中学校レベル，小学校レベルで何やろうかと思っているのは，日常の授業や，その評価にとって，理数科の将来的な能力があるのではないかという子どもをどういうふうに発見し，見きわめていくかということを今研究しています。

もう一つは，選抜された学校，生徒ではないわけですから，学習指導要領に基づいた学習内容をきちんとやっていかなければいけない中で，選ばれた子どもをどのように引き伸ばしていくかという方法を考えなければいけない。そうすると，どうしても，今，中学校は，特にスポーツクラブ等に傾きつつある中で，やはりこれから本気で，いわゆる理科クラブとかサイエンスクラブ，科学クラブというふうなものを復活させていくということが必要だというふうに思っているんですよ。ただ，それには，学校の教員の力というのは限界がありますから，どのように大学や，中学校や小学校レベルでも，大学や企業のラボと，研究室とどのように連携していくかということが，私は必要だと。

そういう点で，決して，中学校から高校へ入学して選ぶときに，理数科を選んで入るけれども，なかなかそこで，本当にその子の能力があったのか，あるいは本当に無理していたのかというのはわかりにくい。そこらはもっと早い時期からいろんな，見きわめ

ていってやることも私は必要だと。特にさっき言ったＳＳの学校なんかに行って学んでいる子どもは，非常にすぐれた能力を持っているわけですけれども，もっと早い時期から見きわめていけば，より近い，早くそういうところへ促していけるんじゃいかと。

私は，ちょっと今年は，そういう点では，私のまちと，あと３つの市と一緒に，大学と一緒にやっていって，今年度は授業の中でどのようにその能力を発見し，見きわめていって，学ばせる意欲，理科クラブで学ばせる意欲をどうつけるかというのが前半で，後半は，理科クラブ，放課後理科クラブの中で，どのように民間企業や大学と連携して子どもの意欲をさらに引き出すかという，今年度の段階はそこだと思っているんですけれども，これは私は高等学校でも十分活用できる方法だというふうに思っております。

以上です。

坂越会長：　ありがとうございます。

前先生，続けてお願いします。

前　委　員：　本校，祇園北高校ですけれども，平成15年に理数コースが設置をされました。内容としたら，もちろん理数設置学科ではありませんけれども，ずっと理数の専門ということで毎年取り組んでおります。内容はどちらかといえば違うんですけれども，現在やっているのは，やはり専門性を高めるということもありますので，ＳＰＰという授業がございますけれども，本年度は広島大学の生物系，それから物理系で勉強させていただいております。年間四，五回ということで，教授，あるいは院生の方に来ていただいて講義をいただいたり，あるいは広大におじゃまをして，いろいろ実験をしてレポートを書いて，教授の先生，あるいは院生とディスカッションをするということで，その中で専門性も高めると同時にプレゼンテーション能力を高めるというようなところも一つの売りに，うちの学校ではしていると。

また，情報のほうで市立大学と連携をして，年間10回程度なんですけれども，いろんなものを持ってきていただいて，専門性の高い情報の授業というのもやっているところであります。先ほど，科学クラブという話もありましたけれども，本校にも科学クラブというのがあって，物理チャレンジとか，いろんなコンテストに向けて，いろいろと準備をしているというようなこともございます。

最近，国泰寺高校のほうが，コアのスーパーサイエンスということで，地域のいろんな勉強をやっていただいていますので。まあ，うちだけではないんですけれども，多くの県立学校，まあ私立も入っていると思うんですけれども，その中で国泰寺に行って共同研究させてもらったり，あるいは広大，東大，京大ツアーとかに声をかけていただいて，そういう非常にいい施設を見せていただいたりというようなこともあったりもします。

本校は，さらにいろんな理数にかかわる講演会であったり，あるいはサイエンスキャンプであったり，いろんなことをやってですね。私のほうも，なかなか，最近，小中でこういう実験というのが少ない中で，いろんな場面が，うちの学校も普通科もやっていますけれども，それ以上にいろんなことをできているんで，何とかこれをもっといいものにしたいなというふうに思っています。

残念ながら，生徒募集について課題がございまして，希望者が増えたり減ったりということがあります。これについて，私も地元の中学校をすべて回って，いろいろと話を聞くんですけれども，特に去年回ったときには，御存知のように中学校も数学の新課程の先行実施ということの中で，何か理数離れが進んだみたいですよというのを聞いたりして不安になったんですけれども，そういう状況もあるというのは聞いていますし，また，進路決定においても，やはり中学卒業のときに，もう理数に決めるというのはいかがなものかと。可能性が減っていくというふうな心配もされているようでありますけれども，実際やっていることを理解してもらえば，本当に理科，数学の好きな子にとってはいいのかなというぐあいに思っております。そういう形で，今，本校の理数はやっている状況ということでございます。

坂越会長：　ありがとうございます。

中学校の理数，それに，これは教員養成をやっている広島大学が本当に言われることなんですけれども，小学校の教員養成で，理科の指導力というのはどうなのかと。小学校の教員養成は文科系ということでありますので，ちゃんと受験指導ができるようにということをいただいております。はい。

もし，事務局のほうで，さっきの件について，何か補足説明がいただければ。

事　務　局：　失礼いたします。本県におきまして，理数関係でコースを設ける大きな計画がござい

ましたのが，前回，今の特色ある学校づくりの前段のところで協議会を設けていただきまして，そのときの答申の中に，基本的に新しい時代に対応した専門分野を深めるコースを設置するというようなことの中で，幾つかの，複数の学校に理数コース，あるいは理数コース的なものを設けさせていただいて，10年経つ中で，それら入学者の状況，あるいは，そこのコースの特色を生かした形で卒業時に進路を実現できている者，こういった状況等をつぶさに点検といいますか評価をさせていただいて，10年たった段階で普通科の状況のほうに戻していくというようなことを試みたコースもございますれば，先ほどお話が出ておりますように，理数の特色を生かした形で教育内容をつくり，それが進路につながっているというような成果を出していただいておるところもあるという状況で，そこから先は，こういった学校の教育内容もあれば，地域の，むしろ子どもたちのニーズ，あるいは充足状況，そういうことが地域的にもさまざまな要素でかかわっていくというふうに受けとめておるところでございますし，また，次にここでいただく議論も大事になってこようかと思っておるところでございます。

坂 越 会 長： 仮にこれが，前回答申で，こうやって10年間やってきて，次また，私たちが今こうやって話している中で，どういうふうな位置づけにするのかということが一つの原案になるとすれば，少しまた整理した資料もいただけたらと思いますので，よろしくお願いします。

はい。

川 野 委 員： 先ほどから理数があったので，芸術とスポーツもなんですけれども，音大で一番，経営状況の厳しさは，やっぱり入学者が少なくなっている。その最大の理由は，やっぱり芸術をやっていて，どう社会に出ていくのよと，あるいは出た後どうなるのよと。みんな広響に入れるのかなんていうと，そんなはずもないわけで。でも，先ほどから何名の方も，吹奏楽の番組の話だとか，吹奏楽のよさを例に，引き合いに出されているんですね。高校までの吹奏楽が，そのまま大学での学びにつながるかというと，そうではないと思います。あの人たちが皆大学へ，エリザベト，あるいは日本中の音大に入ってくれたら，どれだけ日本中の音大は楽なことでしょう。でも実際にはそうでありません。高校までの吹奏楽は，やはりそこでひとつ燃え尽きているところがあります。まず，そのような状況を担っていくことの原因を，しっかり高校教育の中で，やはりコンクール等の，かつ，あるいは，確かにいい試練の場ではあるとしても，そこで終わらないで芸術を極めることの大切さをやはり伝えるような，もう一つ別な芸術観を高校生には伝えないといけないと思います。

熊野高校に芸術のコースが県立であるんです。そこと私たちも提携を結んでいて，県内唯一の音楽科，音楽コースのことだと思うんですけれども，やはり本学の教員が毎月のように教えに行くことによって，熊野高校と私たち，以前，できたころは，確かに非常に，多分希望が多かったんじゃないかというのが，また少し下がっている。でもまたまた増えている。先ほどの理数と同じように，できたころの学科，学科というのかの状況と，やっぱり年を経ると，年月を経ると状況が変わっている。でもそこに，また大学との連携，音楽だけじゃなくて，多分書道は別で，たしか倉敷の学校とも結んでいると思うんですね。

芸術の場合，そこに特化する，専攻できるといったときに，やはり社会が，この芸術をやっていることで，え，それで先どうなるのよというイメージを変えていかないと，あるいは変えていただかないと，そんなものやったって食べられないんじゃないかと。いや，先ほどから言いますように，やはり芸術をやるときも，決して基礎的な教養は外さないでいただきたい。芸術に特化するいろんな育て方があったとしても，基礎基本はしっかりと身につけて，プラスアルファでこういう芸術を持つことによって，コミュニケーション能力だとか，人間関係，社会人基礎能力の基礎は高校時代つきますから。それが終われば，普通の大学に行くにしても，あるいは芸術系の大学に行くにしても，やはり役立つと思うんですが。単に普通科としても何でもできますよということも，いろんな選択肢の可能性があると同時に，普通科の中でも芸術を高校時代から非常に学ぶことができる。それは，私は非常にいいことだと思います。

坂 越 会 長： はい。

赤 岡 委 員： ちょっと突拍子もないことをお話させていただくのですが，先ほど東大ツアー，京大ツアーというお話がありましたので申させていただきます。理系の非常によくできる高校生をそちらに持って行かれたらつらいですね。それなら，広大に来たら，広大卒業した後５年間，毎年500万円の奨学金を出すか，あるいはローンを，利子補給は県がやるか

なんかで，行きなさいよとか，ケンブリッジ，オックスフォード，あるいはハーバード，ＭＩＴに行くのなら500万円出しますよというようなことをやれたらいいなと思っています。私の大学できるかどうかわかりませんけれども，検討しようと思っています。

坂 越 会 長： ぜひ，武田委員さんのところは，やっぱり，ごめんなさい，ちょっと発言前に余計なことを言いますけれども，スポーツもすごく，芸術も力を入れてられるので，学校の特色づくりというような観点のお話をいただければと思っていたところです。

武 田 委 員： まず，第１番目の芸術・スポーツについてだと思うんですけれども，これは，私は高等学校教育の中で，大いにありだと思っています。それは，特色教育の一つとして，それぞれの学校が掲げる人材育成目標に沿った形での育成であれば，何ら問題ないことではないかと，このように思っています。先ほど座長のほうからもお話がありましたように，私のほうの高等学校では，サッカー部，それから和太鼓部，こういったところに力を入れております。和太鼓部はスカウトはいたしませんけれども，選手養成のために，また強くなるために，サッカー部は中国地方を中心として，当たり前ですけれども，スカウトをしております。論が少しずれますけれども，それが広島県の代表かと言われると，少し小さくならないといけないところはあるかと思いますが，やはり養成する，特にすぐれた者を養成する方法としては，こういったやり方が一番手っ取り早いんではないかと，このように思っております。

それから，理数教育，科学技術教育ですけれども，これは，私は２つの意義があるんだろうと，意義といいますか，やり方があるんだろうと思っています。広大附属さんのように，国策として研究費をもらってやるカリキュラムの開発ですとか，それから指導法の開発ですとか，そういったことをやるためのＳＳＨのような理数教育，科学技術教育に力を入れていくものと，文化・スポーツと同じように，それぞれの学校の人材育成目標に沿った形での特色教育として，それぞれの学校が理科なり数学なり，こういったものに力を入れて教育をする。こういったものは大いにありではないかと，このように思っています。

そういった中で，特にすぐれた生徒が，飛び学校，何ていう名前でしたかね，大学に飛び級で学校に進めるという制度を，国家戦略会議が制度化するようにというような話が出てきておりますけれども，これは私，個人的な意見ですけれども，こんなことはあり得ないと，このように思っていまして，今までのようにレアケースとして，高校中退をして大学に行く，こういうのはありだと思うんです。ところが，それを制度化して，高等学校を１年ないし２年で卒業させて，そして大学に入学させる。じゃ，高等学校の教育の意味って何なんだ。何で高等学校は３年間あるんだ。それを何か中高一貫校の６年の間に，最初の５年間で，何単位ですかね，74単位ですかね，取らせて卒業すればいいじゃないかとなんて，ふざけた話であると，このようなことを私も思っておりますけれども，科学技術者等の養成のためには，現行制度であるレアケースとしての飛び級は大いにありではないかと，こういったものも活用されればいいんではないかとは思っております。

以上です。それから，ごめんなさい。多様な生徒に対する対応については，これは，私，難し過ぎてよくわかりません。

坂 越 会 長： ありがとうございます。

西井委員さん，お待たせしました。皆さんの意見を一通り伺ってから御発言を。

西 井 委 員： はい，ありがとうございます。前半戦部分は会社のお話だなと思いながら聞いておりましたけれども，後半戦は全く専門的になってきて，何とコメントしていいのやらという感じですけれども，確かにそういったスポーツとか，理数系とか，私がイメージしている以上にかなり本格的なというか，専門的な分野ということなんだろうと思いますけれども，やはり私も，製造業なんですけれども，製造業というのは，三角関数ではないですけれども，そういった数学ができなければ全くものづくりはできませんので，そういった観点からとらえても，あるいは解決方法のわからないものを解く力といいますか，そういった観点からとらえても，やはり重要なことなんだろうなというふうには思っております。

と同時に，前半戦の話にちょっと戻ってしまうのかもしれませんが，やはり高校生が身につけていくというか，そういった流れの中で，私は，前回も同じような話をしてしまっているんですけれども，やはりリーダーシップ的なところの観点というものが必要なのかなと。リーダーシップ的な観点の中で，よくリーダーシップの中で言われるのが，才覚と器量という言葉，私好きな言葉で使われるんですけれども，才覚と器量という中

で，才覚というのはまさに知識学習，器量というのが人の懐ぐあい，度量というふうによく言うんですけれども，この才覚というところが，今ここにも上がっております基礎学力であったりとか，そういった知識的なところになってくるんだろうと思いますし，逆に，じゃ，人の懐ぐあいを高めるためにはどうしたらいいのというところの中で言われているのが，ジャッジの経験数と失敗の数だというふうに言われているんですね。やはり，ジャッジの経験数と失敗の数を高めていくということになれば，当然のことながら，これは立ち上がる力というものを身につけていかなければ，こけたときに，失敗したときに，そこからもう一度立ち上がる力というものがなければ，そこは上がってきませんし，逆にそういった点からとらえると，先ほど来出ています夢であるとか，向上心であるとか，そういったものがなければ，この立ち上がるということができないんだろうなというふうにも思っています。

そういった点から考えますと，じゃ，この力をつけるにはどうしたらいいのという点に関しますと，私は，やっぱり教員を含め，我々大人というものが，夢を持ちなさいではなくて，夢を我々自身が語る，あるいは我々自身が夢を語りながら行動する姿を見せてあげて，成功体験を示してあげるというものが，やはり大事なのかなという気がしています。そういった流れの中で子どもたちが気づく力といいますか，やはりもう今は昔と違って，あの太陽に向かって走れと言って，おーでついてくる学生というのは皆無だろうというふうに思っています。ですから，逆に言えば，先ほど話に出ていました学ぶことの意味づけというものを感じさせてあげるというのは，これは極めて大事なことだろうと思います。

そういった点から考えると，大人が示すということもそうなんですが，学校の教育現場の方々あたりには，やはりこういう，リーダーシップ論ではないですが，やはり人の力を引き出してあげる，そういったところにおいてリーダーシップ論的なことも，できれば先生あたりがそういうものを学習していただくと，そういった個性を引っ張り出してあげることも可能になってくるんだろうと思いますし，その個性を引っ張り出す流れの中で，先ほど来のスポーツや理数系や，あるいはなじめない子ども，そういったところも引っ張るというところにうまくつながっていくんじゃないかなというふうに，個人的に感じさせていただきながら聞かせていただきました。

以上です。

坂 越 会 長： ありがとうございます。

本当にいろんな御意見いただきまして，最後に西井さんおっしゃってくださったように，やっぱり，またこれは教員という，高校教員というところに返ってくる問題ではありますよね。子どもたちが置かれている状況を見きわめてやるということ，持っている力もそうなんですけれども，理数の力，あるいはスポーツ・芸術，そういったものについて，本当に，皆さん方からいただいたキーワードのほうを繰り返しながらの話なんですけれども，やっぱりそういうところで，失敗体験と成功体験とを交互に繰り返しながら人間というのができていくんだろうというふうに思いますし，そういう環境を高校がどうやってつくっていくのか，そういったあたりかなというふうに思います。

それから，古賀委員さんから，基本的な方向性として，高等学校の共通部分と，それから特色を打ち出す部分，コアとして，それこそ日本の高等学校教育がきちんと担保すべき部分と，それから特徴を，個性を打ち出しながら発揮していく，伸ばしていくというのは，これはやっぱり今あったとおりの形で，すべてが共通というわけではないでしょう。

それから，最後，ケア，特別な支援を必要としている子どもたちというのは，余りここでは出なかったんですけれども，これについては事務局のほうがかなりデータを持っておられるだろうと思うんですよね。やっぱりこれも実態をベースにして話をしたほうが生産的だろうと思います。マスコミ的な意味合いでは決してありませんけれども，例えば県内高校で不登校の子どもたちがどれぐらいいるのかとか，それから経済的な就学支援の是非ですよね，言葉としては。必要としているその生徒たちの置かれている状況，こういったことも，やっぱり委員の共通認識とした上で何が必要かということ。やっぱり，何度も申し上げますけれども，これだけたくさんの高校生がいる時代状況の中で，高等学校を一くくりにはでませんので，在り方を考えるときの大きな基盤にしておきたいというふうには思います。

そろそろ時間なんですけれども，もう御発言……はい。

小 村 委 員： 私は行政を預かる立場から思うのですが，現実にたくさんの学校があるんですね。そ

の全ての学校に同じようにというのは，古賀先生のおっしゃるとおりだと思いますが，中央で仕事をした経験から，中高一貫のエリート校で，子どものときから塾へ行かせて，とにかく受験勉強ができるようにして，それで学力をつけて東大へ行かせた子が，仕事ができているかといったら，決してそんなことはないんですね。学者でも行政マンでも政治家でもそうですが，むしろ，ごく一般の高等学校，普通の県立の高等学校から，本当に学力があって，それなりの大学に行って社会で活躍しているタイプの人の方が現実には多いんですね。

そういう意味で，今議論しているのは，県内に100ほどある高等学校の議論をしているんですから，文化・スポーツにしても，あるいは理数系の子どもたちにしても，高等学校の３年間で，その子の資質を見つけるチャンスがあればいいんじゃないかと思うんです。県立の地方の学校でも，将来，ものすごい学力を持つ研究者として成功する人もおりますしね。必ずしも，それこそ広島の有名な進学高校じゃなければそういう子が出ないなんていうことはないんですよ，実際にはですね。

スポーツでも，高校野球で将来が期待されても，大学では止める子も非常に多いんですね。ところが，高校でそれほど素質があるとは思えなくても，大学，社会人まで続けていく中でぐんと伸びて，プロのすごい選手になったというような人もたくさんいる訳です。

したがって，都市部から地域までたくさんの高等学校が，そこで教えて鍛えているうちに，例えば，自分が理数系として伸びるという，そういう資質に目覚めた者がそれぞれ進めるような，そういうチャンスの場を持てれば，私は，高等学校として，それで用をなすんじゃないかという気がいたします。

坂 越 会 長： ありがとうございます。

そういうことを，ぜひ，県内の，国公私立を合わせてできるようなというか，ちょっと踏み込み過ぎるのかもしれませんけれども，指定校制で，ここの高校はそういう特徴というのは，それはもちろんあっていいし，そこで伸びていく子どももたくさんいるんでしょう。しかし，そうじゃない高校の子どもたちというのが，そういう魅力ある，コアにアクセスできる環境。県内高校でも連携の仕方，幾つかの複数高校などと取り組みされているはずなんですけれども，そういう面で，サークルにしても，クラブにしても，理数にしても，県内の有効な資産，人材を生かせるようなことを，まずは考えられればなという思いを持ちました。すみません。ありがとうございました。

今日，３回目まで協議を踏まえて，「本県を内外から支える人材」，それから「高等学校で身に付けるべき力」，そして今日は，主には「高等学校教育が目指すべき姿」という形でお話をいただきました。基本的にこういう柱建てで，事務局のほうで整理していただいて，まとめをしてもらおうと，こういうふうに思います。それで，次回，この論議の整理を，もう一回この協議会の場で御提示して，それで最終的に，これでみんなの意見がちゃんと反映されているねということを見ていただいて，次にまた答申等に反映させていきたいというふうに思っております。

今日は本当にありがとうございました。

それじゃ，事務局のほう，ちょっと。

馬屋原課長代理： はい。失礼いたします。長時間にわたりまして熱心な御協議をいただき，ありがとうございました。事務連絡を２点させていただきます。

まず，第１点目は，前回の連絡で御説明いたしましたアンケート調査等について，調整がおくれておりまして申しわけございませんが，間もなく事務局の案をお示しできますので，御覧いただき，御意見がございましたら事務局に御連絡をいただきたいというふうに思っております。

２点目ですが，この協議会に対して，教育委員から提案がございました。協議会の委員の皆様に高等学校の様子を実際に見ていただき，議論の参考としていただいてはどうかというものでございます。

これを受けまして，現在，事務局において，高校視察を企画しております。詳細が決まり次第，実施方法，日程等について御相談させていただきたいと思います。このことについて何か御意見，御要望がございましたら事務局にお申し付けいただきたいというふうに思っております。

事務連絡は以上です。

次回，第４回の協議会の日程は，９月７日金曜日の午後からとさせていただき，協議内容は，次回から「本県における今後の高等学校の在り方」を大テーマに変えまして，

まず「今後求められる高等学校について」御協議いただく予定としております。どうぞよろしくお願いいたします。

事務局からは以上でございます。本日はありがとうございました。

（16：00）